九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

シーボルト『NIPPON』の色つき図版

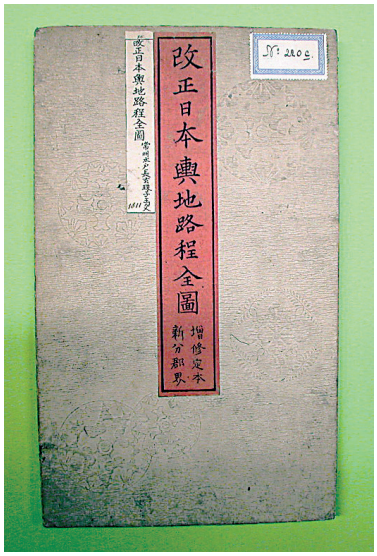
宮崎, 克則
九州大学総合研究博物館

https://doi.org/10.15017/10285

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告. 5, pp.1-56, 2007-01. 九州大学総合研究博物館
バージョン：
権利関係：

[3] 第3・4回配本(1835年)の色つき図版

第3・4回配本は1835年の1月と2月にそれぞれ出たという(1)。第3回配本は「NIPPON　Ⅱ」の日本人の人類学的特徴、「NIPPON　Ⅴ」の宗教についての記述。図版は本文に対応して人物像や目の形、仏像を描いた17枚が配られたが、彩色図はなくすべて色なしであった。第4回配本では、本文として「NIPPON　Ⅰ」の日本への旅行記が出され、図版にはシーボルトが測った長崎港の水深図や景観図、長久保赤水(ながくぼせきすい)の「改正日本輿地路程全図」が出された。図版数は他の配本に比べて少なく、11枚であるが、手彩色による4枚の地図(〔31〕・〔32〕・〔33〕・〔34〕「日本輿地路程全図」)が添えらた。



ライデン大学図書館 蔵

4枚の地図のタイトルは、漢字で「日本輿地路程全図」と印刷されている。原図のタイトルは、表紙に「改正日本輿地路程全図」(内題「新刻日本輿地路程全図」)とあり、水戸藩の『大日本史』編纂にも関係した儒者、地理学者である長久保赤水の作である。作図は、長久保自身の踏査結果や当時の官撰図類、地理・天文学書の比較考証によるもので、後の伊能図にように実測にもとづいていないが、均整のとれた沿岸線の輪郭など図形の正確において画期的であり、江戸時代後半に何度も版を重ね日本図の主流をなした。シーボルトは『NIPPON』本文のなかで、この図は書店で売っており、教養ある日本人は持っている地図だと述べている(2)。

初版は安永8年(1779)、2版は寛政3年(1791)であり、シーボルトは文化8年(1811)の3版を利用している。ライデン大学図書館には、10点の同系統の「日本図」があり、そのなかにはシーボルト以外の人物による収集も含まれている。そのうちの1点(番号　UB220C)の表紙に「56　改正日本輿地路程全図　常州水戸長玄珠子玉父　1811」という付箋が貼られている。この付箋は、収集した図書類をシーボルトが助手のオフマン・郭成章とともに整理して、1845年に刊行した目録を切り貼りしたものであり、筆跡は完全に一致する。目録は125部発行され、巻頭にはラテン語によるシーボルトの緒言と目次があり、第1部の「百科事典類」から第11部の「木版図」まで内容により詳しく分類され、一連の番号が付されている。ラテン語に翻訳された書名・著者・刊記などはホフマンが担当し、漢字による目録は郭成章が転写して石版に刷った。表紙にある付箋は、郭成章が作成した目録を切り取り、貼り付けている(3)。

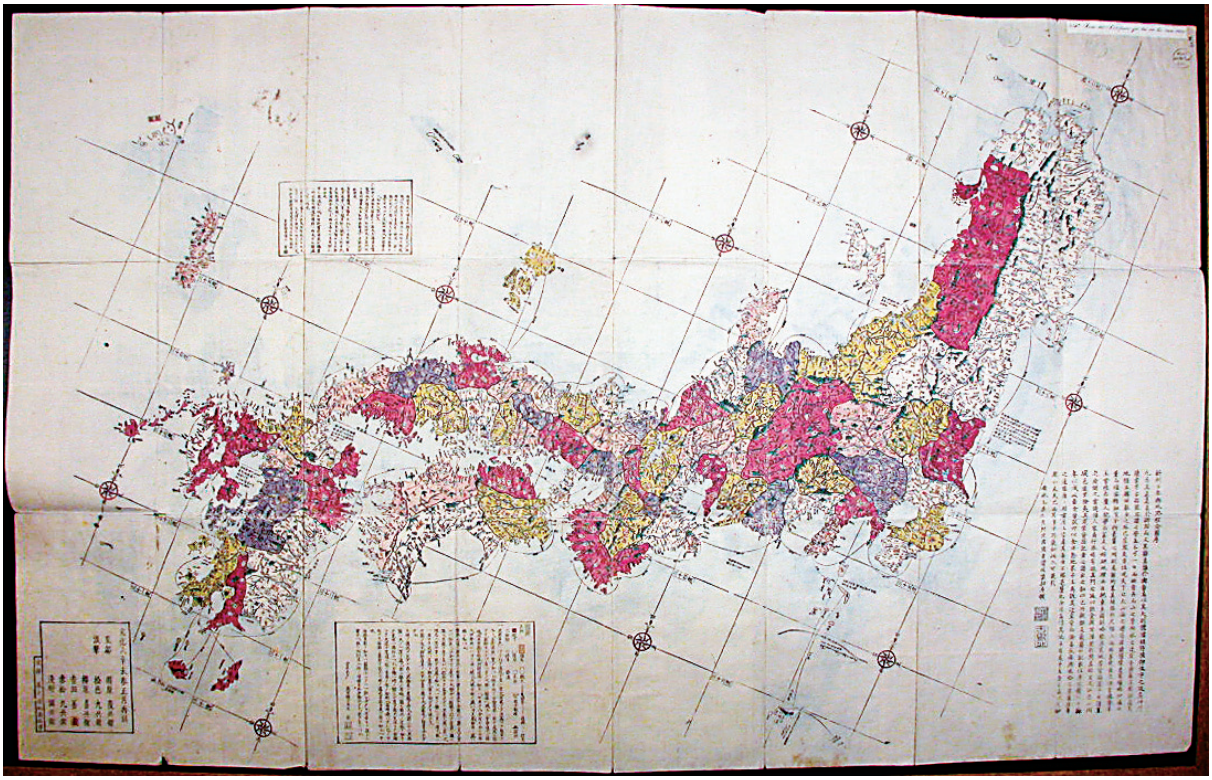
文化8年版をもとに、『NIPPON』用の石版画を描いたのは郭成章であり、シーボルトは本文のなかで「中国の書写生の郭成章に忠実な複写の石版を作らせ」たという(4)。どれほど「忠実」に写しているかまだ検討していないが、シーボルトは地名を日本語のままに写させた。これは第1回配本の「日本辺界略図」の場合と異なり、意図的に行っている。シーボルトは、赤水の地図に緯度・経度はあるが、正確ではないと見抜いており、地名集として刊行したという。彼が意図したところは、「漢字と日本文字で書かれている地名を見つけ出し比較するのに誰にも喜ばれるであろう。このように地図が一般的に役立つことを否定するものではないだろう。現在は漢字と日本文字を読んだり翻訳する機会もあるのだから、地名集としても非常に役立つのは明らかである」と述べる(5)。確かに、現地では翻訳された地図よりもその地の言葉で書かれた地図の方が便利である。シーボルトは、日本の漁民や船乗りは誰でもこの地図を読むことができ、水先案内が可能であるという。

原図の「改正日本輿地路程全図」は縦85cm×横1370cmの大きさであり、シーボルトがこれを4分割して描かせたのも地名を読むことができるようにするためであろう。『NIPPON』のなかの「日本輿地路程全図」は、ファン・ヘルダー社から購入された紙(縦59.5cm×横79.0cm)を切断せずに印刷されている。通常の豪華版図版に比べると、倍の大きさになるので、見開き図または折り込み図として製本されている。

彩色についてみると、原図は国ごとに色分けされてい

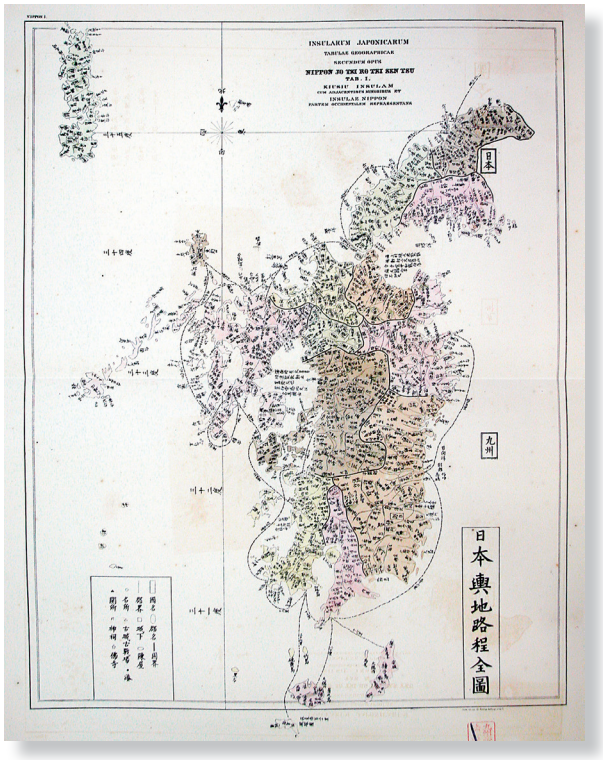
る。『NIPPON』でも国ごとに色分けしており、多少の違いはあるが、原図に沿っている。九州・山口を比べると、原図に赤色でしめされた肥前・豊後・大隅・周防の国は、それほど濃くない赤色系統、ピンク色が塗られている。地名が読めなくなるのを避けるため、薄い色合いが採用されたと思われる（九大本と福岡県立図書館本を比べると、九大本が全体的に薄いが、彩色の仕方にそれほど大きな差はない）。

〔注〕
（1）マティ・フォラー他（『シーボルトと日本』、Hotei出版、Leiden、2000年）。
（2）（4）『シーボルト「日本」』第1巻、277頁（雄山閣、1977年）。
（3）「シーボルト蒐集日本図書目録」（『シーボルトの「日本」の研究と解説』、講談社、1977年）が目録を覆刻している。
（5）『シーボルト「日本」』図録第1巻、687頁、「日本輿地路程全図」のシーボルトによる解説（雄山閣、1978年）。

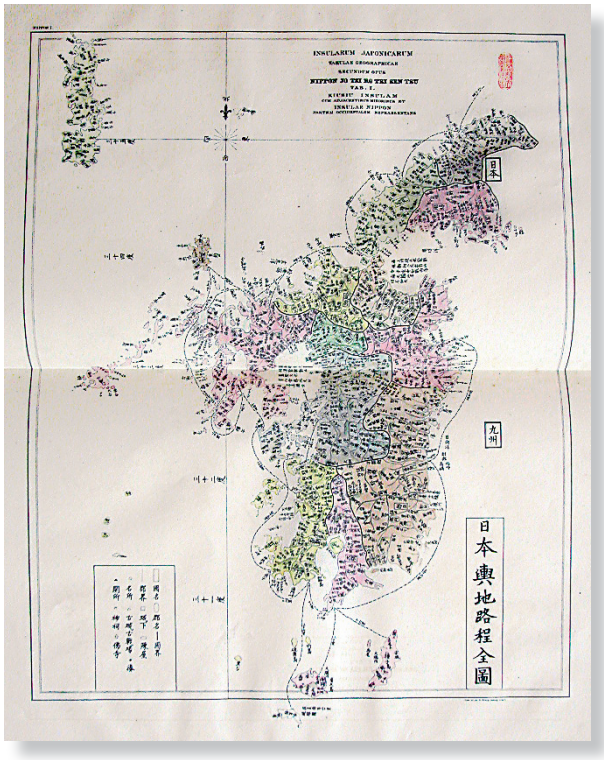


ライデン大学図書館 蔵　文化8年「改正 日本輿地路程全図」

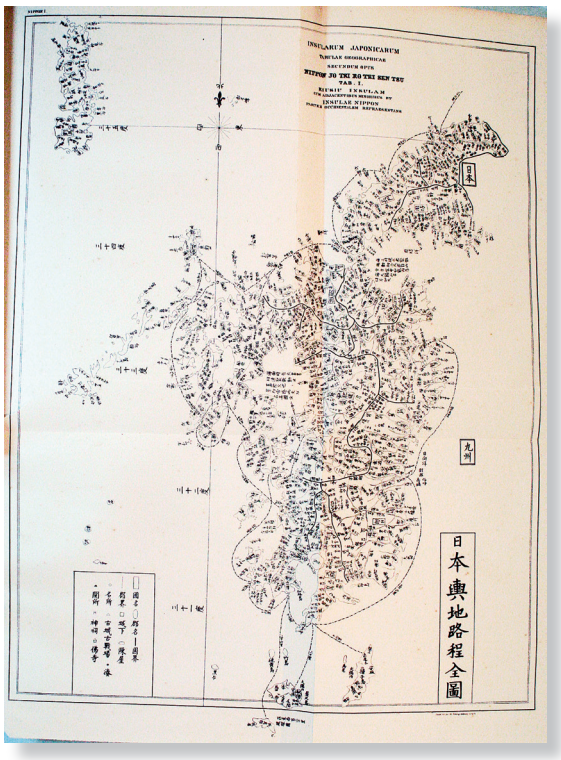
[31～34] NIPPON I 第1図(c)　日本輿地路程全図 ―九州，四国，関東，中部地方，奥羽地方―



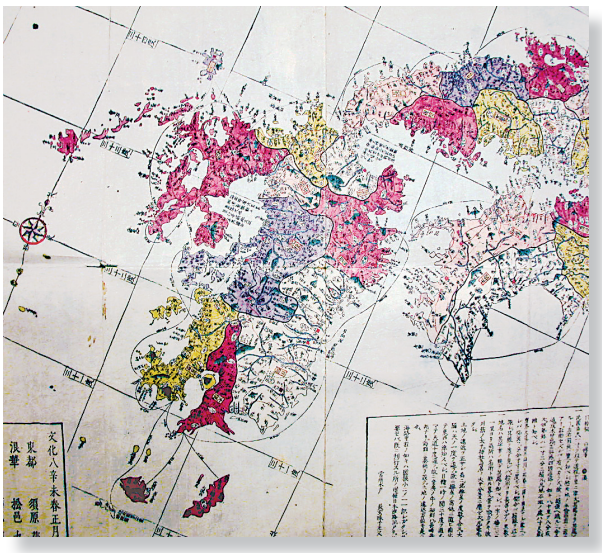
九大本



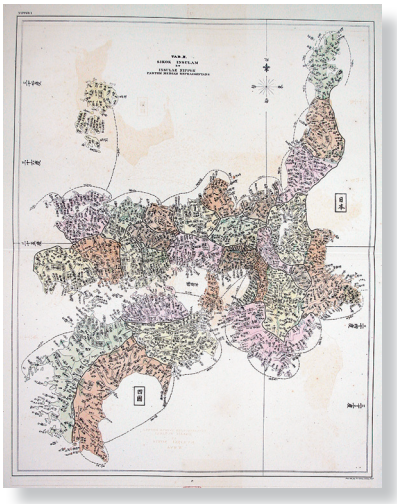
福岡県立図書館本

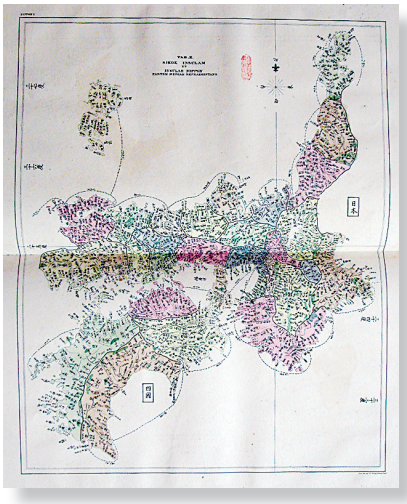


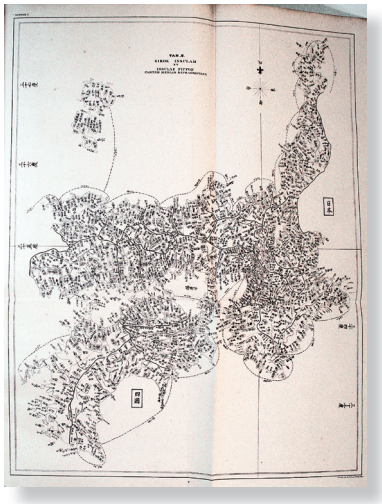
シーボルト記念館本

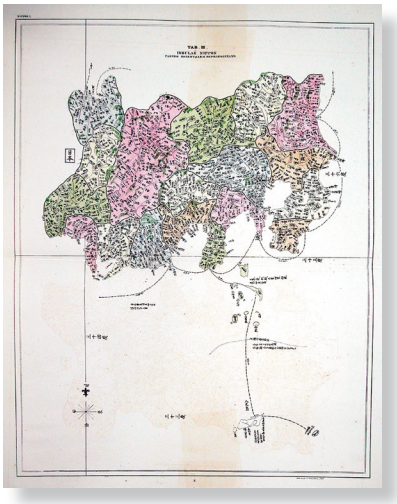


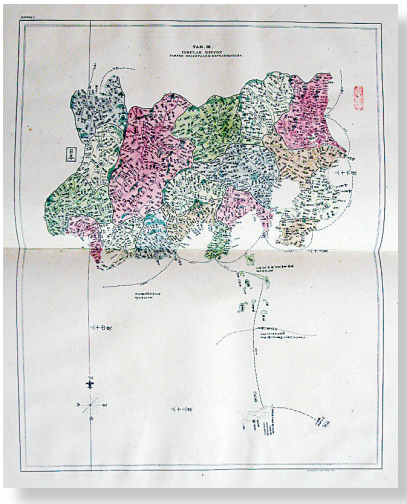
ライデン大学図書館 蔵　拡大図

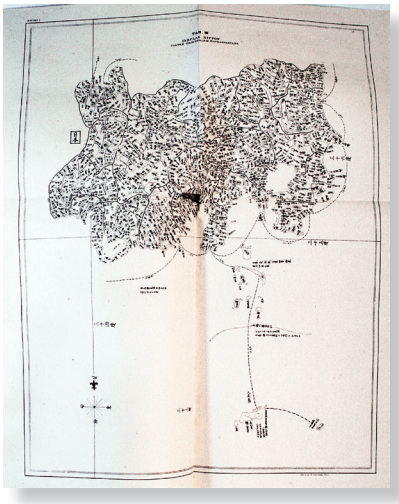

九大本


福岡県立図書館本

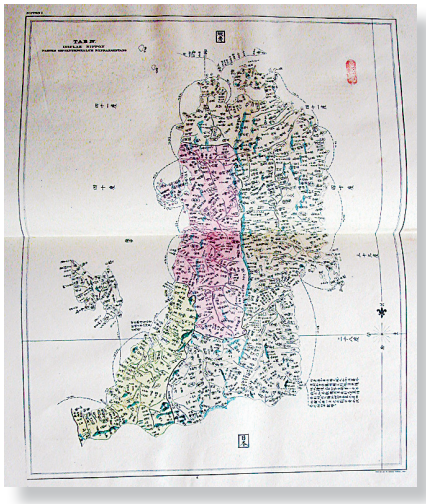

シーボルト記念館本

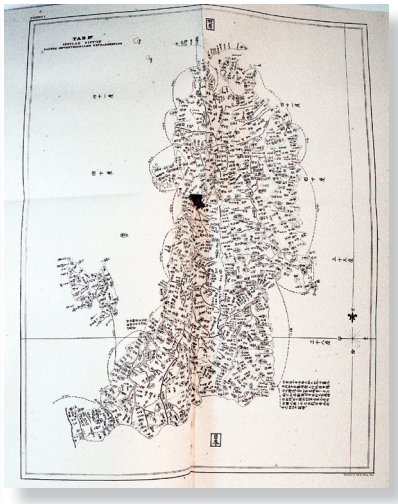

九大本


福岡県立図書館本


シーボルト記念館本

九大本


福岡県立図書館本


シーボルト記念館本

［4］第5・6・7回配本（1839年）の色つき図版

第5・6回の配本年代は不明であるが、第7回配本は配本目録の「INHALT」にあるシーボルトの報告から1839年であることがわかっている。これまで、ほぼ1年に1回のペースで配本されてきたことになる。

第5回配本の内容は、本文が「NIPPON　Ⅱ」の江戸参府旅行記であり、図版は長崎から小倉・下関までの風景画17枚が配られた。原画は川原慶賀のスケッチであり、彩色されていたが、『NIPPON』のなかでは色なしで出された。第6回配本も本文は江戸への旅行記となっているが、図版21枚は陸奥の安達太良山（吾田多良山）から薩摩の桜島まで20か所の山々と、シーボルトの日本妻「おたくさ」らの肖像画であった。この辺りから本文と図版の対応は崩れだしてくる。

第7回配本は合併号であった。それまで1分冊ごとに配本されていたが、7回配本は7・8分冊の合併号であり、図版の枚数は倍増した。41枚のうち6枚に彩色がある。本文と図版はまったく対応しておらず、本文は「NIPPON　Ⅶ」の朝鮮に関する記述。図版は日本の軍事情報と花瓶・香炉などの画であった。戦争用具や歩兵・騎馬武者の画に彩色があり、一部は葛飾北斎が描いたものを原画としている。北斎の原画はライデン国立民族学博物館にシーボルト・コレクションとして保存されている（1）。

〔66〕「戦争用具」の采配や軍配・陣幕を描いた画をみると、九大本は彩色されているが、福岡県立図書館本は色なしである。福岡県立図書館本はクォリッチ版、2折判（大判）の豪華版であり、本来ならば彩色されているはずである。決して色なしの4折判（小判）が挿入されているわけではない。この他にも福岡県立図書館本は無彩色の図版をいくつか含んでいる。その理由として考えられるのは、シーボルトが彩色予定の図版のいくつかを色なしのままで保管していたことによると思われる。クォリッチも彩色せずにそのまま販売した結果、あるものには福岡県立図書館本のように無彩色の図版が含まれ、あるものには彩色図版が揃うこととなった。

クォリッチ版のOAG（ドイツ東洋文化研究協会）本と九大本を比べると、ほとんど同じといえるが、扇の日の丸が大きく違う。OAG本が北斎の原画に沿っているだが、同様の彩色を他の『NIPPON』で未だ見たことはない。また、同じくクォリッチ版の神戸市立博物館本では薄い黄色となっている。こうした細かい部分における彩色の違いは、一人でなく、数人の人々によって彩色されていたことを示している。このことは以後の図版でさらに明らかになる。

〔67〕「戦争用具」も北斎を原画としており、福岡県立図書館本は色なし、神戸市立博物館本は点線の部分を黄色で統一している。現在のところ、この色づかいは1例のみで、他は九大本と同じく原画に沿って赤色で塗られている。

〔73〕「歩兵」は、福岡県立図書館本は色なし、初版の長崎歴史文化博物館本と九大本を比べると、左下にいる歩兵の服装の彩色が異なる。歩兵の服装は青・紫・緑色で塗られており、それぞれの『NIPPON』で微妙に彩色が異なっている。

〔74〕「歩兵」も福岡県立図書館本は色なし、OAG本をみると、歩兵の足下に緑色を塗り、服装にも緑色を多用している。

〔75〕「騎馬武者」も福岡県立図書館本は色なし、神戸市立博物館本では点線の箇所が異なる。

〔76〕「最高指揮官」も福岡県立図書館本は色なし、OAG本と九大本を比べると、服に赤色を塗るやり方がまったく違い、しかもOAG本の背景には水色の空がある。九大本もよく見ると背景に水色が薄く塗られているが、その方法は違っている。

以上、第7回配本は「INHALT」にあるシーボルトの報告によると、前回の配本から少し時間が経っているようであり、彼は配本が遅れたことを詫びている。7・8分冊の合併号として出すために、それまでの倍の図版を用意せねばならず、より多くの図版に色を塗らねばならなかった。その結果、これまでには見られなかったほどに色合いの違いが目立ってきている。

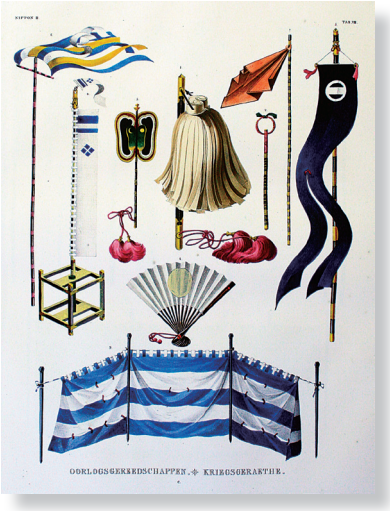
〔注〕
（1）『武器・武具図帖』に葛飾北斎の署名はないが、オランダ紙に書かれた北斎の筆とされている（シーボルト・カウンシル編『ヨーロッパに眠る日本の宝－シーボルト・コレクション－』、長崎県立美術博物館展示会図録、1990年）。

[66] NIPPON Ⅱ 第8図(c)　戦争用具

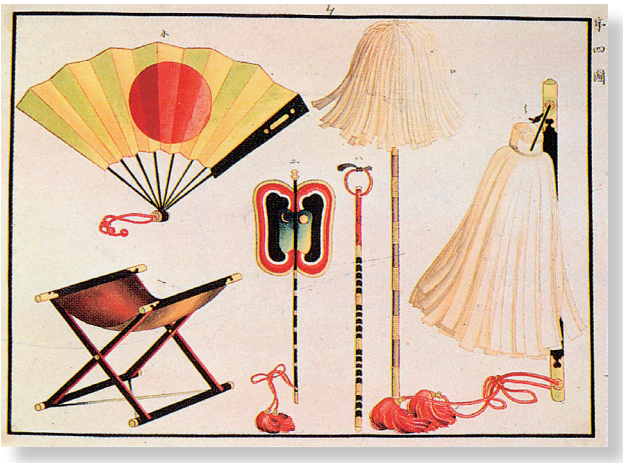
九大本

クォリッチ版　OAG本

福岡県立図書館本

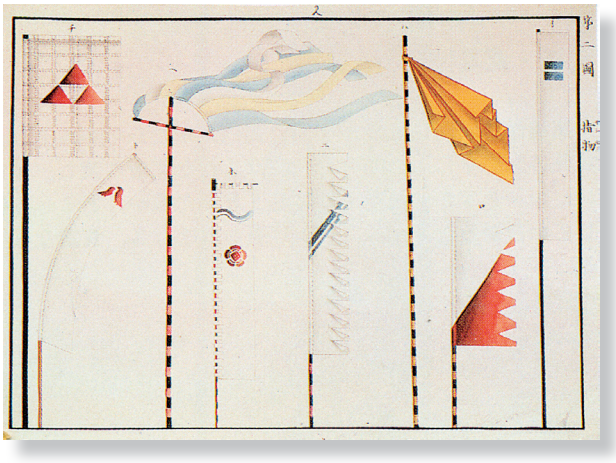


クォリッチ版　神戸市立博物館本



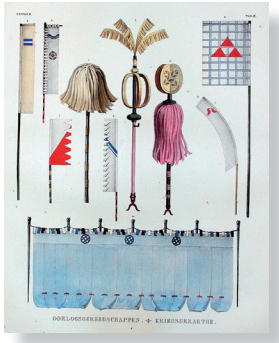
葛飾北斎　『武器･武具図帖』

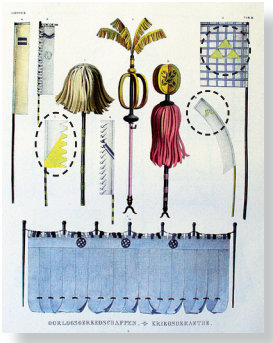
葛飾北斎　『武器･武具図帖』

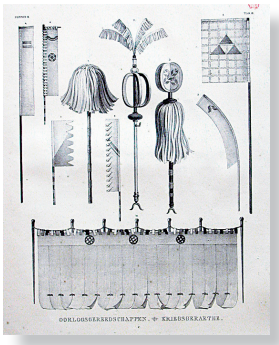


葛飾北斎　『武器･武具図帖』

[67] NIPPON Ⅱ 第9図(c)　戦争用具

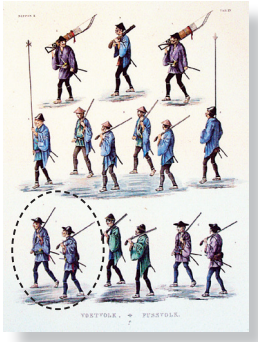

九大本

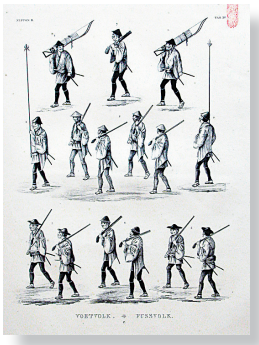

クォリッチ版 神戸市立博物館本


福岡県立図書館本

[73] NIPPON Ⅱ 第15図(c)　歩兵

九大本


初版　長崎歴史文化博物館本


福岡県立図書館本

[74] NIPPON Ⅱ 第16図(c)　歩兵

九大本

クォリッチ版 OAG本

福岡県立図書館本

[75] NIPPON Ⅱ 第17図(c)　騎馬武者

九大本

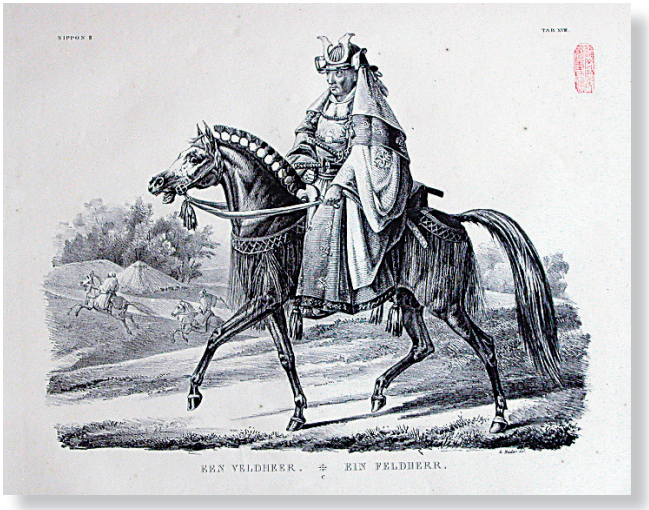
クォリッチ版 神戸市立博物館本

福岡県立図書館本

[76] NIPPON Ⅱ 第18図(c)　最高指揮官

九大本

クォリッチ版 OAG本



福岡県立図書館本